

2023年(令和5年)ズワイガニ漁期前の資源状況

○漁期前の推定資源量(鳥取沖・隠岐北西沖・出雲沖)

松葉がに…前年並みで平年(直近3カ年平均)を下回る。

若松葉…前年並みで平年を下回る。

親がに(雌)…前年、平年を上回る。※1調査点で大量入網があり、資源量推定値はやや過大な評価となっている恐れあり

1. 漁期前の資源状況の根拠となる情報

試験船「第一鳥取丸」による調査結果 10月2日～10月24日にかけて、山陰沖の水深181m～440mの海域の合計28調査点で着底トロール網による漁期前調査を行いました(図1)。調査海域内における漁獲対象となるズワイガニの推定資源量(単位=万個体)は表1のようになりました。

表1 調査海域におけるズワイガニの推定資源量(単位=万個体)

区分	2020年	2021年	2022年	2023年	前年比	平年 2020-22平均	平年比
松葉がに(甲幅10.5cm以上)	46.5	47.0	22.2	24.9	112%	38.6	64%
若松葉(甲幅10.5cm以上)	314.7	172.9	194.2	167.8	86%	227.3	74%
親がに(くろこ)	176.7	128.6	104.4	282.9	271%	136.5	207%

※くろこ：漁獲対象となる茶黒色や黒紫色をした卵を持ったメスガニ

松葉がに：2023年漁期の漁期前の推定資源量は出雲沖で前年よりやや増加したため、前年比112%となりました。一方で、平年比では64%となっており、昨年に引き続き資源状況が低位で推移している傾向が伺える結果となり、今漁期の水揚げも「前漁期並み」になると考えられます(表1、図2左)。漁獲サイズについては、甲幅12cm以上の大型個体(18.2万個体)が甲幅10.5～12cmの小～中型個体(6.3万個体)より多い結果となり、近年の傾向同様に大型中心の水揚げになると考えられます(図4)。

若松葉：出雲沖で前年より減少、隠岐北西でやや増加し、前年比86%、平年比74%となりました(表1、図2中央)。2020年漁期から漁期の短縮、1航海当たりの水揚げ枚数を大幅に減らす等の資源管理強化を行っており、資源量に対する現状の漁獲圧は相当低い状況にあると考えられます。このことから管理に基づく水揚げの制限により、今漁期の水揚げも「前漁期並み」になると考えられます。サイズは甲幅10.5～12cmの個体は前年並み(前年比99%)となっており、甲幅12cm以上の大型個体は減少(前年比52%)しました。小～中型主体の水揚げとなることが予想されます(図4)。

親がに：隠岐北西で大幅に増加したことから推定資源量は前年比271%、平年比207%となりました(表1、図2右)。隠岐北西の調査地点1点で漁獲対象とならない初産個体のアカコおよび漁獲対象となる経産個体のクロコが大量入網したことから、やや偏った調査結果となっていることが予想され、実際の資源状況は推定した資源量ほど大幅に増加している状況にはないと考えられます。

ただし、国の水産研究・教育機構の調査結果でも2023年漁期からメスガニ中心に資源が回復することが予測されていたこともあり、本調査結果でも同様に資源状況が好転しており、メスガニ資源が回復基調にあることは間違いないと考えられます。

親がにも資源管理強化のため、1航海当たりの水揚げ枚数を制限する取組を2020年漁期から強化しており、2023年漁期も取組を継続することから、今漁期の親がにの水揚げはやや増加する程度に抑えられると考えられます。漁獲サイズは、甲幅7～8cmの小型個体の割合が77%、甲幅8cm以上の大型個体の割合が23%の結果となっており小型個体中心に水揚げが予測されます。

2. 参考情報

- (1) 鳥取県の沖合底びき漁業による漁獲量の推移：本県のズワイガニ漁獲量は 2004 年に 1,587 トンまで増加したが、その後は減少～横ばいで推移しています（図 5）。2022 年漁期の漁獲量は松葉がに 227 トン、若松葉 40 トン、親がに 268 トン、合計 535 トンで、前年（567 トン）及び過去 3 年平均（701 トン）を下回りました。
- (2) （国研）水産研究・教育機構 水産資源研究所（以下、水産資源研究所）の調査結果（調査月：5-6 月）：日本海 A 海域（富山県以西）における 2023 年漁期当初のズワイガニ資源量について、カタガニ（松葉がに）、ミズガニ（若松葉）、メスガニ（親がに）とも、前年並みかやや上回ると推定しています（図 6）。
- (3) 大型クラゲ：調査期間中に目立った大型クラゲの入網はありませんでした。

3. 今後の資源状況

水産資源研究所による資源評価調査（5-6 月）では、日本海 A 海域（富山県以西）における 2023 年のズワイガニ資源量は、小型のミズガニ、メスガニの資源量が増加し、資源が回復傾向にあることが分かっています（図 6）。

今後、漁獲対象となる小型の若齢がにが増えていて、小型のカニが操業時に混獲されるリスクが高い状況にあります。水温がまだ高い 11 月における再放流後の生残率は低いことから、漁獲対象サイズのカニを増やすために小型のカニが多い海域では操業を控えるなど資源保護の取組みがより重要になると考えられます。

ホームページ 本報告は水産試験場ホームページに掲載しており、トップページの「調査研究」からアクセスできます。

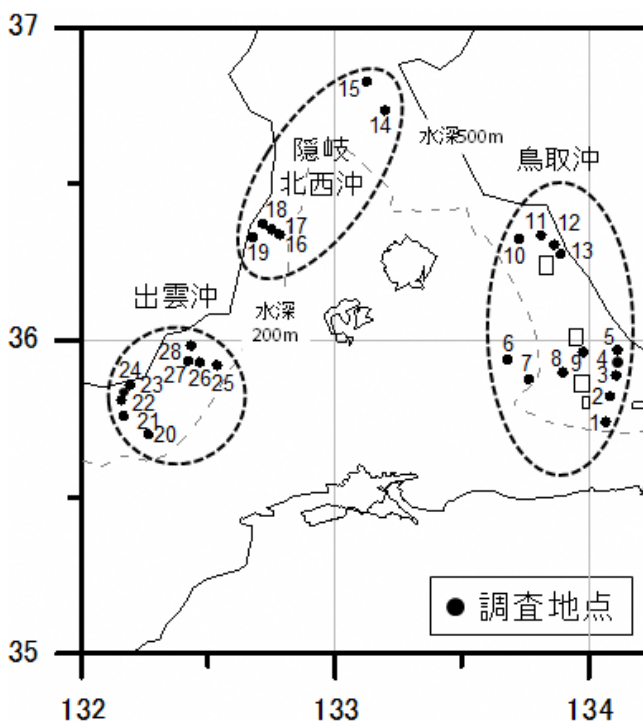


図 1 試験操業位置

その他

2015 年漁期から松葉がにのうち、大きさ・品質・型とも最上級の松葉がにをトップブランド「特選とっとり松葉がに五輝星」として販売を開始しています。

（五輝星の基準）

大きさ	甲幅 13.5cm 以上
形状	脚が全てそろっているもの
重さ	1.2kg 以上
色合い	鮮やかな色合い
身入り	身が詰まっていること

2022 年漁期は約 40.7 万枚水揚げされた松葉がにの中から、272 枚（2015 年以降で史上最多枚数：平均 4.6 万円/枚、最高額 100 万円/枚）が五輝星に選定されました。本調査結果から大型の松葉がに（甲幅 13.5cm 以上）の資源量は前年並み（前年比 108.9%）となりました。

一方で、昨漁期は近年になく、漁期開始当初に大型の松葉がにが多く水揚げされ、深場にいる大型の松葉がにを狙いの操業が多かったとの情報もあることから、今漁期は昨漁期ほど五輝星の水揚げ枚数は多くないと考えます。

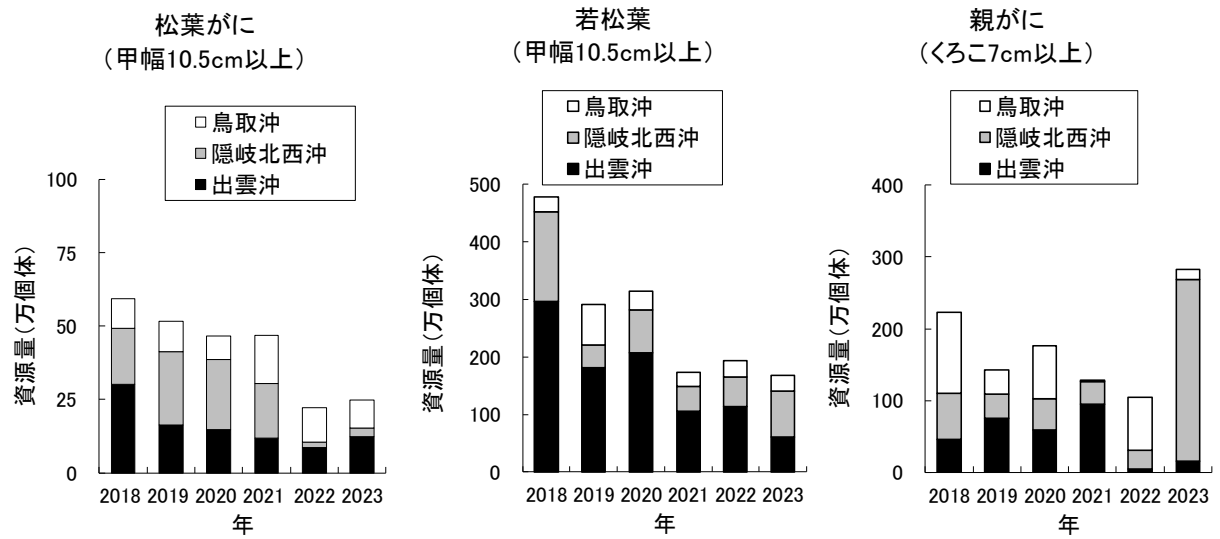


図2 年別海域別の資源個体数 (2018-2023年)

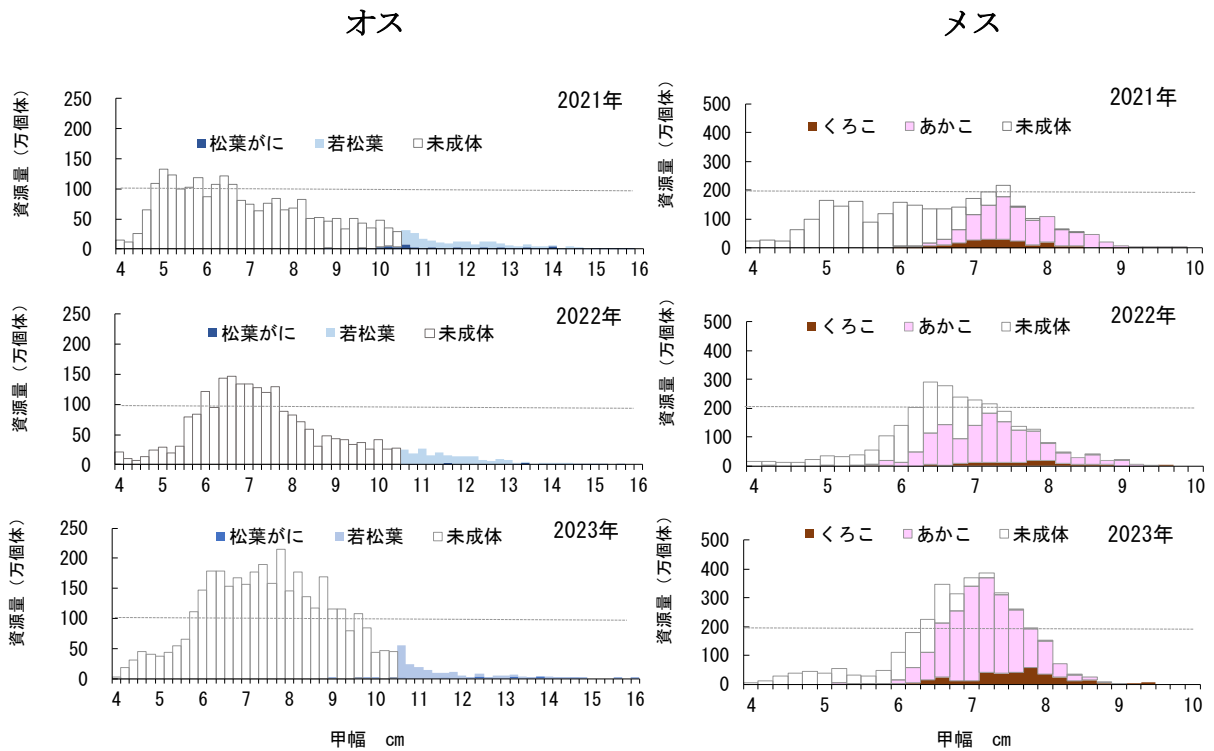


図3 調査海域全域におけるズワイガニ甲幅組成の推移 (2021-2023年)

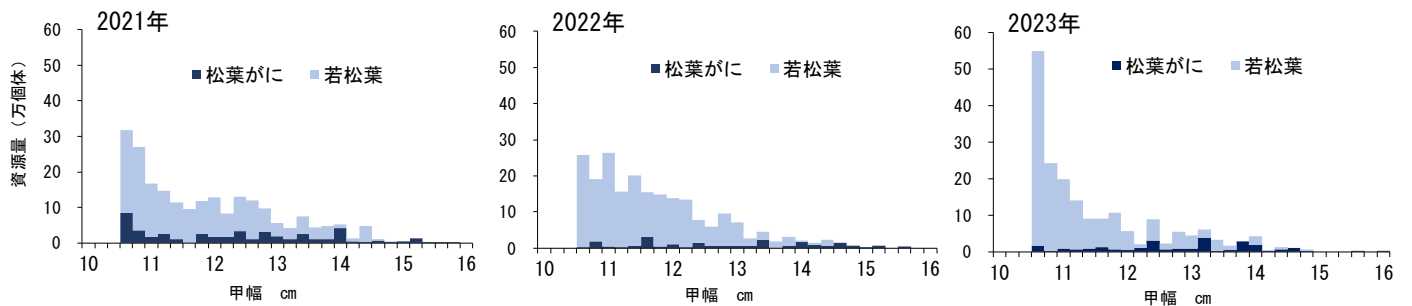


図4 調査海域全域における漁獲対象サイズ (甲幅 10.5cm 以上) の雄ズワイガニの甲幅組成の比較 (2021~2023年)

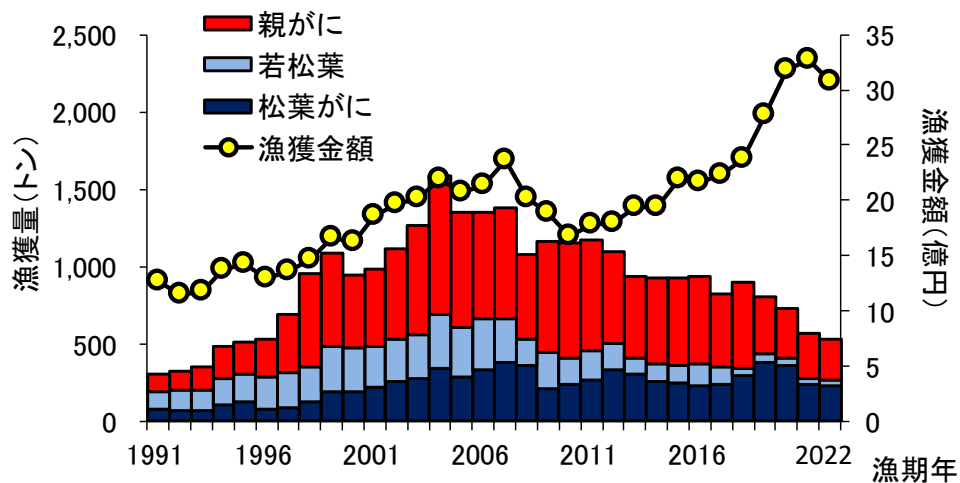


図5 鳥取県におけるズワイガニの漁獲量（漁期年：11月6日～翌年3月20日）

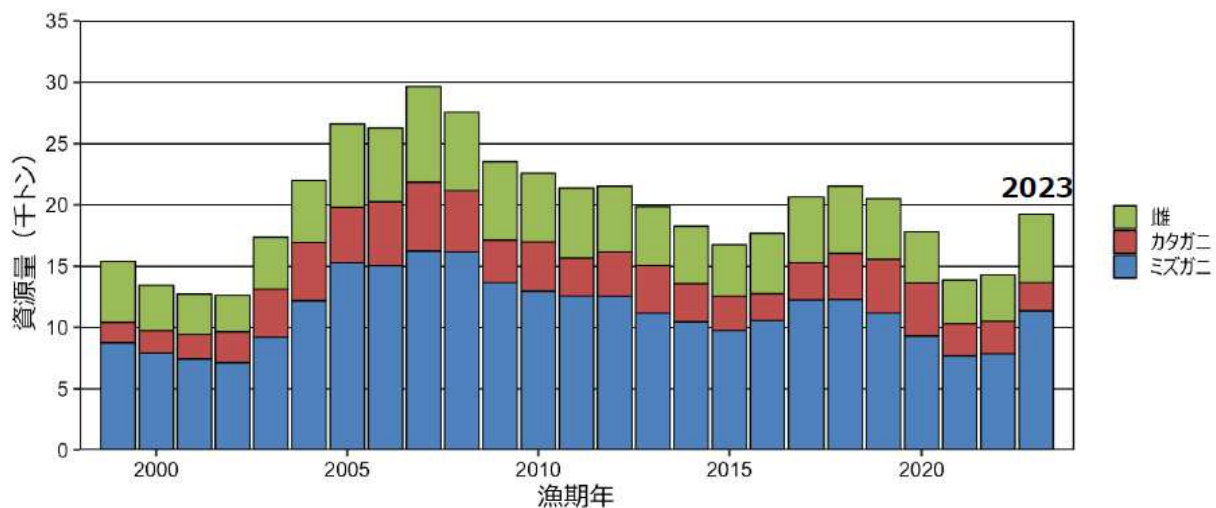


図6 日本海A海域（富山県以西）におけるズワイガニの推定資源量
（水産研究・教育機構 水産資源研究センター 底魚資源部 作成資料）